

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32681

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720277

研究課題名(和文) 留学生の就労支援環境構築のための基礎研究 元留学生のライフストーリー研究

研究課題名(英文) Basic Studies for Environmental Construction of Employment Support for International Students: A Research Studies Based on the Life Stories of Former International Students

研究代表者

三代 純平 (Miyo, Jumpei)

武蔵野美術大学・造形学部・講師

研究者番号：80449347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：元留学生へのインタビューを通じて、彼ら/彼女らがどのように日本での就職活動を経験しているのか、そして、どのように日本での就労を経験しているのかを明らかにしていました。

インタビューの考察から、日本で就職するためには、早期からの支援と「重要な他者」の存在が重要であることがわかりました。また、彼ら/彼女らは、自らを「グローバル人材」として位置付けて、働いていること、同時に、日本社会に壁を感じていることも明らかになりました。

これらの知見から、持続可能な多文化共生社会を日本に実現するために必要な、留学生への支援のあり方が見えてきました。

研究成果の概要(英文)： In this study, I will discuss how international students experience their job hunting and employment in Japan. By analyzing their life stories, I will point out the significance of support from an early stage of study abroad and 'a key person' who support job hunting for international students to find employments in Japan. Also, I will describe the situation that they are having difficulties participating in Japanese society although they identify their selves as global talents.

From above discussion, we can gain a suggestion about support for international students in order to realize sustainable a multicultural symbiotic society.

研究分野：日本語教育

キーワード：ライフストーリー 元留学生 就職 グローバル人材 重要な他者 文化資本 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、学術振興会特別研究員として2008年度より2年間助成を受け、韓国人留学生のライフストーリーから留学生の学びについて研究してきた。研究により、留学生が、コミュニティに参加する経験やそこで形成した人間関係を、留学生活におけるもっとも重要な「学び」として本人たちが位置づけていること、そのプロセスにことばの学びが埋め込まれていることなどを論じた。当時の調査協力者の多くは、日本での就職を希望したが、当時日本での就職は非常に困難であった。就職は、調査協力者のアイデンティティ交渉において大きなモメントであり、日本社会に参加する上で、最も大きな経験といえる。社会参加にことばの学びがあるのなら、就職とことばの学びの関係を改めて考える必要があると考えた。

同時に当時は「グローバル人材」育成が社会的課題として認知され始めた時期で、留学生の日本就職は社会的な課題でもあった。ただし、就職支援についての議論は、一方で技術的な議論(就職活動の方法やビジネス日本語など)が中心となり、他方、「グローバル人材」の捉え方は抽象的な人間像に終始している印象があった。

2. 研究の目的

1で述べた背景から、研究代表者は、就職活動を社会参加の経験として捉え、どのような問題があるのか、そして、どのような支援が可能なのかを、当事者である(元)留学生の語りから具体的に考察する必要があると感じた。

よって、留学生の就職活動、持続的な日本での就労を支えるために、日本語教育はどのような支援が可能かを探るべく、ライフストーリー・インタビューを通じて、元留学生の就職という経験の実態を明らかにすることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

ライフストーリー研究法を用いた。アジア系の(元)留学生、約30名に対し、ライフストーリー・インタビューを行った。インタビューは、1回から4回行い、録音されたデータのトランスクリプトと、フィールド・ノーツを主な考察の対象とした。

4. 研究成果

研究成果について以下の5点から述べたい。

- 留学生の就職活動という経験
- 留学生の就労経験
- スポーツ留学生という領域
- 日本語教育学としてのライフストーリー研究
- 留学生の就職支援体制の構築

についてであるが、ライフストーリー調査を通じて、留学生がどのように就職活動を経験しているのかが見えてきた。まず就職活動を支えたものに「重要な他者」があった。「重要な他者」とは、アスリート学生の進路を決定する役割を担う存在として議論されるものであるが、留学生の就職も往々として「重要な他者」による支えにより決定していた。その役割を担うのは、ゼミの社会人学生や進路支援を担当する事務員、日本人の先輩であったりした。ここで注目すべきは、特定のスキルよりも包括的なサポート体制の構築をいかにつくるかという観点が一つである。また、「重要な他者」と共に就職活動を続けるうえで興味深いことは、そこで、留学生は「留学生」「中国人」「韓国人」等を含む)というアイデンティティを強く意識するという点である。これは、特定の個人と関係を深めることで固定的なアイデンティティが相対化される傾向があるのに対し、異なった結果である。就職活動は国籍を文化資本=本人の価値として行われるが、それが、時に固定的なアイデンティティ観につながりやすいことは、留意が必要である(詳細は、5の業績(6)(7)(10)を参照のこと)。

についてであるが、日本企業で働く調査協力者は、自らを「グローバル人材」として位置づけていた。彼ら/彼女らにとって「グローバル人材」とは、自国と日本の言語・文化双方に精通し、お互いの国の調整役を担うことができる人材のことである。調査協力者たちは、就職活動を通じて、その自らの価値に「グローバル人材」=日本を良く知る「外国人」であることを置くが、それは仕事を通じて深められていく。

これは、彼ら/彼女らの社会的価値であり、それを内面化することは自己肯定観にもつながり、社会人としての成長とみなすこともできる。

一方で、自らが設定した、同時に、会社から求められる二つの「言語」「文化」の間の摩擦に苦しみ、それが、日本社会への壁として感じられてもいる現状もあった。多くの企業は、留学生を採用する際の懸念として、転職の可能性を挙げている。しかし、このような摩擦も、調査協力者たちの転職・帰国の大きな動機づけとなっていた。

少子化社会の日本において、持続可能な社会を築いていくためには、留学生の国内採用を増やし、定着しやすい環境を作っていく必要がある。多文化共生社会とグローバル人材育成の接点を論じることの必要性、そのために、「グローバル人材」の議論、研究が作り出すモデルストーリーに還元されない、ライフストーリーの共有の重要性を研究代表者は主張した((7)(10)を参照のこと)。

についてであるが、調査の過程で、スポーツ留学生として来日し、日本での就職を検討

している調査協力者に会った。スポーツ留学生は年々増加の傾向にあるが、運動部に所属し、日本語教育の現場に現れることも少ないため、日本語教育としては、ほとんど議論されてこなかった。インタビューを通じて、スポーツ留学生という新しい領域における進路支援のあり方を議論することが出来た。同時に、日本人のアスリート学生の進路支援のあり方は、スポーツ研究の領域で大きな関心となっており、研究が充実していた。「重要な他者」という概念をはじめ、多くの示唆を得ることができたことは、大きな成果であった(詳細は、(4)を参照のこと)。

であるが、研究を通じて、その方法論についての考察を深めることができた。多くの質的研究法がそうであるように、調査経験から研究方法自体が作り出されていく。

従来日本語教育におけるライフストーリー研究は、社会学における研究法を援用していたが、日本語教育学に資する研究のあり方を探求することができた。2013年に日本語教育学会の大会で社会学者と共にライフストーリー研究法に関するパネルセッションを行うことができたこと、そのパネルをもとに、雑誌『リテラシーズ』でライフストーリーをテーマに特集を企画し、さらにその企画が論集の出版につながったことは非常に大きな成果である(詳細は、(3)(5)(9)(10)を参照のこと)。

最後に についてであるが、本研究の知見に基づいた実践を少しずつ形にできている。日本語教育学の大きな目的として実践の向上への寄与があげられる。その意味で、日本語教育学としてのライフストーリー研究は、実践への還元を意識した記述のあり方や共有のあり方を模索する必要がある。

で重要な他者の関わりの重要性を述べ、で、モデルストーリーに還元されないストーリーの共有の重要性を論じたが、これらの知見に基づいた実践研究を現在継続中である。研究期間中に、研究代表者は、所属機関を徳山大学から武蔵野美術大学に移動したが、その両校において留学生の就職支援講座を立ち上げた。そのコンセプトは、多様性の重視と、技術よりもつながりの重視である。徳山大学では、地元の中小企業で活躍している人に講演、および留学生とのディスカッションを依頼した。留学生は、大手企業がモデルとなる日本企業のイメージとは異なる各企業の価値観、そこで働く実際の間人と触れあることになる。同時に、企業の方にも実際の留学生を知ってもらえる良い機会となった。また武蔵野美術大学では、就職課スタッフと協同でクラスを運営することで、就職課の人に多様な留学生のアイデンティティを認めることの重要性を説明すると同時に、「重要な他者」としての役割の一端を担ってもらえるようになった。同時に、日本企業で

働く元留学生、海外で働く日本人アーティストなどをゲストスピーカーとして呼ぶことで、多様なロールモデルに触れる機会を作った。両実践共に、稼働したばかりだが、すでに就職した学生を輩出している。

今後は、ライフストーリー研究と就職支援の実践の実践研究を有機的に関係付けながら留学生支援をより充実させていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 三代純平 (2013). 「個の文化」探求としての言語文化教育研究 - ライフストーリー研究と実践研究の経験を通じて、『言語文化教育研究』11, pp.2-12.
- (2) 三代純平 (2013). ビジネス日本語教育における「文化」の問題 「アジア人財資金構想プログラム」以降の先行研究分析 『徳山大学総合研究所 紀要』第35号, pp.173-188
- (3) 三代純平 (2014). 日本語教育におけるライフストーリー研究の現在 その課題と可能性について 『リテラシーズ』14, pp.1-10.
- (4) 三代純平 (2014). セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語 - スポーツ留学生のライフストーリーから 『言語文化教育研究』12, 言語文化教育研究会, pp.221-240.

〔学会発表〕(計3件)

- (5) 三代純平, 石川良子, 佐藤正則, 中山亜紀子 (2013). 日本語教育におけるライフストーリー研究の意義と課題, 担当部分: 司会, 第2パネル「日本語教育におけるライフストーリー研究」, 2013年度日本語教育学会春季大会, 立教大学 (2013.5.25)
- (6) 三代純平 (2014). 「グローバル人材」になるということ 元留学生のライフストーリーから, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会第34回研究会, 早稲田大学 (2014.11.8)
- (7) 三代純平 (2014). 留学生の就職支援を考える - 元留学生のライフストーリーから, 言語文化教育研究会第1回研究集会, 明日香日本語学校 (2014.12.13)

〔図書〕(計3件)

- (8) 三代純平 (2015). 「ことば」「文化」、そして「教育」を問い直す, 神吉宇一(編) 『日本語教育学のデザイン その地と図を描く』凡人社, pp.77-pp.100.
- (9) 三代純平 (印刷中). 「声」を聴くということ 日本語教育学としてのライフストーリー研究から, 館岡洋子(編) 『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版.
- (10) 三代純平 (編) (印刷中). 『日本語教育

学としてのライフストーリー 語りを聞き、書くということ』くろしお出版。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 三代純平

武蔵野美術大学（講師）造形学部

研究者番号：80449347

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：